

# 宰相チャーナキヤの格言詩

—— *Cāṇakyanītidarpaṇa* 和訳 (2) ——

堀 田 和 義

## はじめに

本稿は、マウリヤ朝の創始者であるチャンドラグプタ（紀元前 4-3 世紀頃）の宰相チャーナキヤ（Cāṇakya）に帰せられる格言詩 *Cāṇakyanītidarpaṇa*（チャーナキヤが説く処世の鏡）の第 9 章から第 17 章までの和訳である。*Cāṇakyanītidarpaṇa* の概要、および第 1 章から第 8 章までの和訳は、堀田 2017 を参照していただきたい。

翻訳に際しては、堀田 2017 と同様、Sternbach 本（Sternbach 1963 所収）を底本とし、2 種類のドイツ語訳（Kressler 1907, Böhntlingk 1966）を参照し、Böhntlingk 1966 に対応詩節が見られる場合は、その番号を詩節末尾の括弧内に記した。その他にも、入手したものの中から、比較的信頼できるとされる 2 種類のヒンディー語訳、およびヒンディー語注（Caudharī 1999 と Kumāra 2016）を参考にした。

堀田 2017 と同様、*Nītiśataka* の和訳（辻 1982）、*Prajñāśataka* (PŚ)、*Vinayakṣudrakavastu* の Bharata の教訓（VKBh）、*Śatagāthā* (ŚG) の和訳（岡田 1991, 1994, 1995）に見られる関連詩節の番号やページも注記した。他にも、*Prajñādaṇḍa* (PD) の関連詩節を挙げることができたのは、神戸女子大学瀬戸短期大学名誉教授の岡田行弘先生のご厚意により、PD の訳注の草稿（岡田草稿と表記）を参照させていただいたおかげである。岡田行弘先生、そしてご協力いただいた立正大学法華経文化研究所研究員の岡田文弘氏に感謝申し上げたい。

また、本稿のもとになった東大寺勸学院における「インド思想入門」の講義の際に、貴重な助言をいただいた受講生の方々にも感謝申し上げる。

## 第9章

- 9・1 愛児よ、お前が解脱を求めるならば、〔感覚器官の〕対象を毒のように捨てなさい。<sup>(1)</sup>そして、寛容、正直、憐れみ、満足、真実を甘露のように受け入れなさい。(4877)
- 9・2 最低の人たちは、お互いの痛いところを口にし、彼らは破滅へと赴く。それはあたかも、蟻塚や〔王子の〕体内の蛇のようなものである。(3942)
- 9・3 黄金の香り、砂糖黍の果実、白檀の花を作らなかった。賢者を裕福にすることもなく、王を長寿にすることもなかった。かつて、創造者(=ブラフマン)に智慧を授ける者は誰もいなかったのだ。(2081)
- 9・4 すべての薬草の中では甘露が第1のものであり、すべての喜びの中では食事が第1のものである。すべての感覚器官の中では目が第1のものであり、すべての肢の中では頭が第1のものである。(6959)
- 9・5 使者が虚空に行くこともなく、便りが虚空を伝わることもない。また、以前に言われたこともなく、直に接することもできない。虚空にある太陽と月の蝕を予言することができるバラモンが、<sup>(2)</sup>どうして賢者ではないだろうか。(2898)
- 9・6 知識を求める者、召使い、旅人、飢えに苦しめられている者、恐怖に悩まされている者、金庫番、門衛。これら7つが眠っていたら起こすべきである。(6096)
- 9・7 蛇、王、虎、豚、子供、他人の犬、愚者。これら7つが眠っていても起こすべきではない。(827)
- 9・8 実利のためにヴェーダを学習し、シュードラの出す食事を食べるようなバラモンたちに何ができるだろうか。それはあたかも毒のない蛇のようなものである。(625)
- 9・9 怒っても恐ろしくなく、満足しても決して財産をもたらさず、罰も恩恵

- もないならば、その者が怒ったところで何ができるだろうか。<sup>(3)</sup>(5358)
- 9・10 毒のない蛇でも頭部を膨らませるべきである。毒があろうがなかろうが、膨らんだ頭部は恐怖を引き起こす。(3770)
- 9・11 朝は賭博に耽溺し、正午は女に耽溺し、夜は盗みに耽溺して、愚者たちの時は過ぎて行く。<sup>(4)</sup>(4318)
- 9・12 自分の手で編まれた花輪、自分の手ですり潰された白檀、自分の手で書かれた讃歌は、インドラの威厳さえも奪ってしまう。<sup>(5)</sup>(7333)
- 9・13 砂糖黍、ゴマ、シュードラ、愛しい女、黄金、大地、白檀、凝乳、キンマ。これらは圧迫することで美質が増大する。(1085)
- 9・14 貧しさは賢明さにより、粗末な衣を纏っていることは清らかさにより輝きを放つ。粗食であることは熱さにより、容姿の悪いことは良い気質により輝きを放つ。(2713)

## 第 10 章

- 10・1 財産のない者は貧しくはなく、確かに豊かである。〔しかし、〕知識という宝石のない者は、あらゆる物が欠けている。(3057)
- 10・2 目で清めてから足を置くべきであり、布で清めてから水を飲むべきである。学問で清めてから言葉を述べるべきであり、心で清めてから行動すべきである。(2934)
- 10・3 幸福を求めるならば知識を断念すべきであり、知識を求めるならば幸福を断念すべきである。幸福を求める者がどうして知識を得られるだろうか。知識を求める者がどうして幸福を得られるだろうか。<sup>(6)</sup>(7088)
- 10・4 詩人たちに見ることのできないものがあるだろうか。女たちにできないことがあるだろうか。酒飲みたちに喋ることのできないことがあるだろうか。カラスに食べることのできないものがあるだろうか。(1582)
- 10・5 運命は物乞いを王にし、王を物乞いにする。富者を貧者にし、貧者を富者にする。(5700)
- 10・6 貪欲な者たちにとって物乞いは敵であり、愚者たちにとって教師は敵

である。不貞な女たちにとって夫は敵であり、盗賊たちにとって月は敵である。(5862)

10・7 知識もなく、苦行も布施も行わず、良い気質もなく、美質も<sup>ダルマ</sup>法もない。そのような者たちは大地の重荷であり、獣が人間の姿をして人間界を彷徨っているのである。(5573)

10・8 中身の無い者たちを教えることはできない<sup>(7)</sup>。マラヤ山と結び付いたからといって、竹が白檀になることはない。(349)

10・9 自らに理解力がない者に対して、論書に何ができるだろうか。両目がない者に対して、鏡に何ができるだろうか<sup>(8)</sup>。(5380)

10・10 地上には、悪人を善人にする方法は決して存在しない。排泄器官を100回清めても、最高の器官<sup>(9)</sup>になることはない。(2849)

10・11 自分を憎むことにより死が訪れ、他者を憎むことにより財産が消滅する。王を憎むことにより身を滅ぼし、バラモンを憎むことにより一族が破滅する。(889)

10・12 虎や強力な象が住む森で、木を家とし、葉や木の実や水を食料とし、草の上で眠り、100カ所が破れた檻を身に纏うこと。親族の間で財産なしに生きるよりはこれらの方がましである<sup>(10)</sup>。(5949)

10・13 バラモンは木であり、祈禱はその根である。ヴェーダは枝であり<sup>ダルマ</sup>、法と祭式は葉である。それゆえに、努めて根を守るべきである。根が断たれてしまったら、枝も葉も決して存在しない。(6165)

10・14 ラクシュミー女神<sup>(11)</sup>を母とし、ヴィシュヌ神<sup>(12)</sup>を父とし、ヴィシュヌの信者を親族とするならば、三界は自分の国の中にある。(4788)

10・15 様々な色<sup>(13)</sup>の鳥たちが一本の木に止まり、翌朝には十方へと〔飛び去って行く〕。そのことについて、何の嘆きがあるだろうか。(1376)

10・16 知性のある者には力がある。知性のない者に、どうして力があるだろうか。森では奢りに酔い痴れたライオンが、ウサギによって殺された<sup>(14)</sup>。(5386)

10・17 もしヴィシュヌが「一切を養う者」と呼ばれるならば、私の生活に何<sup>(15)</sup>



の心配があるだろうか。そうでないならば、どうして子供を養うために母親の乳房を作ったのだろうか。ヤドゥ族の主よ、ラクシュミーの夫よ、<sup>(17)</sup>何度も繰り返してこのように考えて、ただあなたの蓮のような御足に礼拝することで、私は常に時を過ごしている。(1620)

10・18 たとえ神々の言葉(=サンスクリット語)に関する優れた知識があったとしても、私は別の言語も強く求める。それはあたかも、神々には甘露があっても、天界の女たちが注ぐ劣った酒も好むようなものである。

10・19 穀粉は米の10倍優れており、乳は穀粉の10倍優れている。肉は乳の8倍優れており、精製バターは肉の10倍優れている。(363)

10・20 野菜により病気が増大し、乳により身体が増大する。精製バターにより精力が増大し、肉により肉が増大する。

## 第11章

11・1 布施する者であること、好ましいことを語る者であること、勇敢な者であること、適切なものを知る者であること。これら4つは訓練によって得られるのではなく、生まれつきの美質である。(2748)

11・2 味方を捨てて、敵方に頼る者は自滅する。それはあたかも、他の法<sup>グルマ</sup>〔に依ること〕によって王が自滅するようなものである。(906)

11・3 象は身体が大きい鍵棒の支配下にある。〔だからと言って〕鍵棒が象と同じ大きさであろうか。灯火が輝くと闇が減びる。〔だからと言って〕闇が灯火と同じ大きさであろうか。<sup>ヴァジュラ</sup>金剛杵に打たれると山は崩れ落ちる。<sup>(19)</sup>〔だからと言って〕山が金剛杵と同じ大きさであろうか。その者の威光が輝いていれば、強力なのである。大きいことに何の信頼があるだろうか。(7380)

11・4 カリ時代になると、10,000年の間、ヴィシヌが大地を放棄する。ガンジス川<sup>(21)</sup>の水はその半分(=5,000年)の間、〔大地を放棄し〕、村落の神は〔さらに〕その半分(=2,500年)の間、〔大地を放棄する〕。<sup>(20)</sup>(1577)

11・5 家に執着している者に知識はなく、肉を食べている者に憐れみはない。財産に貪欲な者に真実はなく、女の虜になっている者に清浄さはない。

(2193)

- 11・6 多様な方法で教育を受けても、悪人が善人になることはない。根元から乳と精製バターを注いでも、ニンバ樹<sup>(22)</sup>が甘くなることはない。(3295)
- 11・7 内面に汚れがある邪悪な者は、聖地で 100 回沐浴しても清められることがない。それはあたかも、スラー酒の器が焼かれても清められることがないようなものである。(339)
- 11・8 他者の美質の卓越性を知らない者は、常にその者を非難する。これは珍しいことではない。それはあたかも、キラータ女が象の頭から得られた真珠<sup>(23)</sup>を捨てて、グンジャー樹〔の実〕を身につけるようなものである。(3445)
- 11・9 1 年が満ちるまで常に沈黙して食事をとる者は、10 億ユガの間、天界において繁栄する。(5339)
- 11・10 性愛、怒り、貪欲、美味、装飾、祭り、寝過ぎ、耽溺。知識を求める者は、これら 8 つを避けるべきである。(1649)
- 11・11 森に住むことを常に好み、耕していない〔地面から生じた〕木の実や根によって日々シュラーツダ祭を行うならば、そのバラモンは聖仙と呼ばれる。(47)
- 11・12 一食で満足し、常に 6 つの行為に専心し、月経期にだけ女性と交わるならば、そのバラモンは再生族と呼ばれる。(1408)
- 11・13 世俗的な活動を好み、家畜を保護し、商業や農業に従事するバラモンは、ヴァイシイヤと呼ばれる。(5891)
- 11・14 赤い染料など、ゴマ油、藍、サフラン、蜂蜜、精製バター、酒、肉を商うバラモンは、シュードラと呼ばれる。(5843)
- 11・15 偽善的であり、他者の仕事を妨害するが自分の利益は促進し、奸計をめぐらし、憎しみを抱いており、柔和であるが残酷なバラモンは、猫と呼ばれる。(3916)
- 11・16 池、井戸、貯水池、遊園、寺院を破壊するのに躊躇しないバラモンは、ムレーツチャと呼ばれる。(6042)
- 11・17 賢者の財産や師の財産を〔盗み〕、人妻に近付き、あらゆる生き物を

生活の糧にするバラモンは、チャーンダーラと呼ばれる。

11・18 ボージャ王よ、財産を布施しなさい。行いの良い者たちは、決して財産を蓄積してはならない。〔布施をしたことにより、〕尊敬すべきカルナ、バリ、ヴィク라마王の名声は、今日もなお存続している。「布施することも享受することもなく、長いあいだ私たちが蓄積してきた蜂蜜が失われてしまった。」ああ、蜜蜂たちはこのように考えて、失われてしまったがゆえに両手両足を擦り合わせているのである。<sup>(25)</sup> (2939)

## 第 12 章

12・1 家に喜びがあり、息子たちが非常に賢明であり、妻が優しく語り、欲望を満たすための財産があり、自分の妻に対する愛があり、召使いたちが自分の命令を至上のものとし、<sup>(26)</sup> 客人を歓待し、シヴァ神を崇拜し、美味しい食べ物と飲み物が毎日あり、常に家で善き人と交際する。このような家住期は幸いである。(6998)

12・2 憐れみを備えた人が苦しんでいるバラモンたちに対して、たとえほんの僅かであっても信心を込めて布施をするならば、王よ、バラモンたちに与えた〔だけの〕ものを得るのではなく、無限倍のものを手に入れる。

12・3 親族に対する親切、他人に対する憐れみ、悪人に対する絶えざる不誠実、善人に対する愛情、邪悪な者に対する驚異、賢者に対する正直さ、敵に対する勇敢さ、両親に対する寛容、女性に対する狡猾さ。このように諸技に巧みな者に依拠することで、世間は存続している。(2738)

12・4 その両手は布施をすることなく、両耳は雄弁な者を憎み、両目は善き人たちを見ることがなく、両足は聖地へ行くことがなく、胃袋は不正な手段で手に入れた財産で満たされ、頭は驕りによって高く上がっている。ああ、ジャッカルのように卑しい者よ、卑賤な者の非難すべき身体を直ちに捨てなさい。(7382)

12・5 尊敬すべきクリシュナの蓮のごとき御足に対する信愛がなく、クリシュナ<sup>(28)</sup>の美質を語ることを舌が好まず、尊敬すべきクリシュナの遊戯により魅<sup>(29)</sup>

力的な物語を両耳が熱望しないならば、その者たちは忌々しいことこの上ない。<sup>(30)</sup>〔クリシュナの〕称賛に合わせて叩かれる太鼓は、常にそのように述べる。(5567)

12・6 カリーラ樹に葉がないからといって、春に過失があるだろうか。フクロウは日中に目が効かないからといって、太陽に過失があるだろうか。チャータカ鳥の口に雨が降らないからといって、雲に過失があるだろうか。運命により前もって額に刻まれたものを、誰が拭い去ることができるだろうか。<sup>(31)</sup>  
(3895)

12・7 実に、悪人たちは善き人たちとの交際によって善人になるが、善き人たちが悪人たちとの交際によって悪人になることは決してない。<sup>(32)</sup>土だけは花から生じる香りを帯びるが、花が土の香りを帯びることは決してない。  
(6747)

12・8 善き人たちと会うことは善業〔をもちたす〕。なぜならば、善き人たちは聖地のようなものだからである。聖地は時を経て実りをもたすが、善き人たちとの交際は直ちに実りをもたす。(6993)

12・9 バラモンよ、仰って下さい。この町で偉大な者は誰ですか。<sup>(33)</sup>ターラ樹<sup>(34)</sup>の群れです。布施者は誰ですか。朝に衣を受け取って、夜になると返す洗濯屋です。巧みな者は誰ですか。どんな人でも人妻や他人の財産を奪うのに巧みです。あなたはどのように生きているのですか。おお、友よ、私は毒の中<sup>(35)</sup>で生まれた虫の喩えによって生きています。(6164)

12・10 バラモンのための洗足水でできた泥がなく、ヴェーダや教典の音が響いておらず、スヴァーハーやスヴァダーという音が聞こえないような家は、墓場に等しい。

12・11 真実は母であり、知識は父、<sup>ダルマ</sup>法は兄弟、憐れみは姉妹、寂静は妻、忍耐は息子である。これら6つが私の親族である。(6734)

12・12 身体は無常であり、財産も永遠ではなく、死は常に近くにある。〔それゆえに、〕<sup>ダルマ</sup>法を蓄積すべきである。(292)

12・13 バラモンにとっては招待食が祭りであり、牛にとっては新鮮な草が祭  
139(8)

りである。妻にとっては夫が喜びであり、クリシュナよ、私にとっては戦いが祭りである。<sup>(36)</sup> (973)

12・14 人妻を母親のように、他人の財産を土塊のように、万物を自己のように見る者は、真に見る。<sup>(37)</sup> (4805)

12・15 <sup>ダルマ</sup>法に対する専心、口 (=言葉) の甘美さ、布施に対する熱心さ、友人に対する誠実さ、師に対する恭しさ、心の極めて深いこと、行いの清浄さ、美質を見分ける感覚、学問に関する知識、容姿の美しさ、シヴァに対する信愛。<sup>(38)</sup> おおラーマよ、あなたにはこれらのものがある。(3129)

12・16 <sup>(39)</sup>如意樹は木片であり、スメールは山、如意宝は石、太陽は鋭い光線を持つもの、月は欠けてゆくもの、海は塩辛いもの、カーマ神は身体が減じた者、バリはデイディの息子、<sup>(40)</sup>如意牛は常に家畜である。おお、<sup>(41)</sup>ラーマよ、私はあなたをこれらに例えることはない。[あなたを] 何に例えることができるだろうか。(1713)

12・17 王子たちからは礼儀を、賢者たちからは雄弁を、賭博者たちからは不正直を、女たちからは嘘を学ぶべきである。(6127)

12・18 よく考えずに浪費する者、保護者がいないのに諍いを好む者、あらゆる土地で病んでいる者は、速やかに滅びる。

12・19 賢者は食べ物のことを心配するべきではない。実に、<sup>ダルマ</sup>法だけを思案するべきである。なぜならば、人間の食べ物は誕生とともに生じるからである。<sup>(42)</sup> (3695)

12・20 水滴が落ちることで水瓶は徐々に満たされる。あらゆる知識、そして<sup>ダルマ</sup>法、財産でも、原因は同じである。(2357)

12・21 年をとっても、悪人は悪人のままである。十分に熟しても、インドラ<sup>(43)</sup>ヴァールナ草 [の実] は甘くならない。(5943)

## 第 13 章

13・1 たとえ一瞬でも、人は清らかな行いによって生きるべきである。2つの世界と矛盾する汚れた行いによって 1 カルパも生きるべきではない。<sup>(44)</sup>

(4905)

13・2 過去のことを悲しむべきではない。未来のことを心配するべきではない。賢者たちは現在という時間に従って行動するものである。(2073)

13・3 実に、神々、善き人たち、父親は、本性によって満足する。親族は沐浴と飲み物によって満足し、賢者たちは言葉という布施によって満足する。<sup>(45)</sup>

(7300)

13・4 ああ、偉大な者たちの行いの奇妙なことよ。彼らは幸運〔の女神〕を取るに足りないものと考えが、それ（=幸運〔の女神〕）の重みで頭を垂れる。<sup>(46)</sup> (837)

13・5 愛着を抱いている者には恐怖もある。愛着は苦しみの器である。苦しみは愛着を根としており、それら（=苦しみ）を捨てて、幸福に生きるべきである。(5401)

13・6 未来に対処できる者と心の準備ができていう者という、この両者は幸福を増大するが、運命論者は減じる。<sup>(47)</sup> (268)

13・7 王が法<sup>ダルマ</sup>を守れば〔人民も〕法に従い、邪悪であれば邪悪となり、普通であれば普通となる。〔人民は〕王に従うものであり、王によって人民は異なる。(5768)

13・8 思うに、法<sup>ダルマ</sup>を欠いている者は、たとえ生きていても死んでも同然である。法を備えている者は、たとえ死んでいても長命である。<sup>(48)</sup>〔この点に〕疑いはない。(2430)

13・9 法<sup>ダルマ</sup>、実利、性愛、解脱のうちの1つすら備えていない者の生まれは、あたかも山羊の首にある乳頭のように、無意味である。<sup>(49)</sup> (3120)

13・10 卑しい者たちは、他者の名誉という非常に鋭い火で身を焦がされており、その地位に達することができないので非難する。(2737)

13・11 心が〔感覚器官の〕対象に執着すると束縛をもたらし、〔感覚器官の〕対象を離れると解脱をもたらす。人間にとっては、心こそが束縛と解脱の原因である。(4383)

13・12 身体〔が自己であると〕の思い込みが消滅し、最高のアートマンが認

識されると、心がどこに向かおうと、そこに三昧がある。(2966)

13・13 心で望んだ樂のすべてを誰が得られるだろうか。すべては運命によるものであるから、満足するべきである。(1148)

13・14 子牛が千頭の牝牛の中でも母親へと向かって行くように、為された行為〔の潜在力〕は行為者に従う。(5114)

13・15 為すべきことが定まっていない者は、人々の間にいても、森にいても、幸福ではない。人々の間にあっては交際が身を焦がし、森にあっては孤独が身を焦がす。(258)

13・16 鋤で掘ることにより地面に水が見つかるように、献身的な弟子は師の中に隠された知識を見出すことができる。(5095)

13・17 人間の〔行為の〕果報は行為次第であり、知性も行為に従う。それでも賢明で尊い者は、正しく考察してから行動する。(1568)

13・18 ただ1つの音節<sup>(50)</sup>を授ける師に敬意を表さない者は、犬として100回生まれ<sup>(51)</sup>た後に、チャーンダーラのもとに再生する。(1400)

13・19 ユガの終わりにメール山は揺らぎ、カルパの終わりに7つの海<sup>(52)</sup>は氾濫する。善き人たちは、約束した事柄から決して逸脱することがない。(5508)

## 第14章

14・1 地上には、水、食物、金言という3つの宝がある。しかし、愚者たちは石ころを宝と名付ける。(4186)

14・2 貧困、病気、苦しみ、束縛、災難。人間にとって、これらは自身の罪過という木の果実である。(2777)

14・3 財産、友人、妻、王国。これらはすべて再び手に入るが、〔人間の〕身体は何度も繰り返して手に入るものではない。(4126)

14・4 多くの者が集まれば、敵を征服することができる。大量の雨をはらんだ雲は、草の束でも防ぐことができる。<sup>(53)</sup>(4424)

14・5 水に入れたゴマ油、悪人に打ち明けた秘密、適切な者に対する布施、賢者に授けた学問は、たとえ僅かであっても、そのものの力によって自ずと

拡大する。(2365)

14・6 <sup>ダルマ</sup>法に関する説明を聞く時、墓地にいる時、病気になった時に生じる考えがいつでもあるならば、誰が束縛から解放されないだろうか。(3108)

14・7 もし後悔している者の考えが先に生じるならば、誰が幸運を享受できないだろうか。(1210)

14・8 布施、苦行、勇敢さ、知識、<sup>ダルマ</sup>礼儀、世知に関して驚いてはならない。なぜならば、大地には多くの宝石があるからである。(2760)

14・9 心の中にいる者は、遠くにいても遠くにいない。心の中にいない者は、<sup>(34)</sup>近くにいても遠くにいない。(2906)

14・10 好ましいものを他者から〔得ようと〕求めるならば、その者にとって好ましいことを絶えず言うべきである。獵師は獣を仕留めるために、美しい声で歌を歌う。<sup>(55)</sup>(5367)

14・11 王、火、師、女には適度な距離で接するべきである。これらは近付きすぎると破滅をもたらし、遠くにいと果報をもたらさない。(176)

14・12 火、水、女、愚者、蛇、王家には、常に注意深く接するべきである。これら6つは直ちに命を奪う。(64)

14・13 美質を備えた者は真に生きており、<sup>ダルマ</sup>法を備えた者も真に生きている。美質と法を欠いている者の人生は無意味である。(6682)

14・14 ただ1つの行為で世の人々を支配したいならば、言葉という牛が他人の悪口という穀物へ向かうのを止めなさい。<sup>(56)</sup>(5245)

14・15 機会に相応しい言葉、本性に相応しい好み、自分の力に相応しい怒りを知る者は賢者である。(4287)

14・16 ただ1つのもの(=女性の身体)も3通りに見られる。〔すなわち、〕ヨーガ行者たちからは死体、恋する男たちからは恋人、犬からは肉と見なされる。(1344)

14・17 非常に効き目のある薬草、<sup>ダルマ</sup>法、家の欠陥、性交、悪食、醜聞。賢者はこれらを表に出すべきではない。(7046)

14・18 すべての人々に喜びをもたらす声が鳴り響くまでの間、コーキラ鳥は



沈黙のうちに日々を過ごす。(2554)

14・19 <sup>ダルマ</sup>法、財産、穀物、師の言葉、薬草は、正しく把持すべきである、そうでないと、生きられない。

14・20 悪人との交際を放棄し、善人と交際するべきである。日夜、善業を行い、〔物事が〕無常であることを常に念じるべきである。(2621)

## 第 15 章

15・1 あらゆる生き物に対する憐れみによって心が和らいでいる者にとって、知識、解脱、髻、〔身体に〕灰を塗ることが何になるだろうか。<sup>(57)</sup>(5368)

15・2 師が弟子にただ一音節でも教えたならば、それを与えれば〔師に対する弟子の〕負債がなくなるような財産は、地上に存在しない。<sup>(58)</sup><sup>(59)</sup>(1367)

15・3 悪人たちと棘に対する対抗策は 2 種類だけである。すなわち、靴で顔を打つことと遠ざけることである。(2046)

15・4 服装の悪い者、歯に汚れのついている者、大食の者、言葉の荒い者、日の出と日の入りに寝ている者。幸運〔の女神〕は、もしヴィシヌヌであつても、これらの者を見捨てる。(1788)

15・5 同盟者、妻、召使い、友人は財産を失った者を捨てるが、財産を手に入れると再び頼りにする。実に、世間においては、財産こそが人間の友である。(2622)

15・6 不正な手段で手に入れた財産は 10 年間だけとどまる。しかし、11 年経つと根こそぎ失われてしまう。(377)

15・7 力のある者にとっては不適切なものも適切となり、卑しい者にとっては適切なものも過失となる。ラーフにとっては甘露も死〔の原因〕となり、<sup>(61)</sup>シヴァにとっては毒も装飾となる。<sup>(62)</sup><sup>(63)</sup>(563)

15・8 バラモン<sup>ダルマ</sup>の食べ残しが真の食べ物であり、他者のために為されることが真の友情である。悪業を行わないことが真の賢明さであり、偽りなしに為されることが真の法である。(2483)

15・9 宝石は足の先を転がり、ガラスの欠片は頭上で保たれる。〔しかし、〕

売買する時には、宝石は宝石であり、ガラスはガラスである。(4656)

15・10 学問は無限であり、知識は多様である。時間は極めて少なく、障害は多い。〔それゆえに、〕最も優れたものに専念すべきである。あたかも、ハンサ鳥が水の中から乳を選び取るように。<sup>(64)</sup>(245)

15・11 遠方からやって来て路上で疲れを覚え、理由もなく家にやって来た者。そのような者を歓待することなく食事をする者は、実に、チャーндアーラと呼ばれる。(2909)

15・12 4 ヴェーダを唱え、法典を何度も唱えても、人々は自己をまったく知らない。それはあたかも、匙が料理の味を知らないようなものである。  
(3872)

15・13 バラモンという小舟は幸いであり、生存という海において反対に作用する。下にいる者たちはみな海を渡り、上にいる者たちは下に落ちる。  
(3076)

15・14 月は甘露の容器であり、薬草の主でもある。その身体は甘露から成り、美しさを備えているけれども、太陽の領域に達すると光を失う。他人の家に入ったら、誰が謙虚にならないだろうか。(551)

15・15 蜜蜂は蓮の葉の中にいる時は、蓮の蜜による酔いで怠惰になるが、運命により他の場所にやって来ると、クタジャ樹<sup>(65)</sup>の花の蜜を重宝する。(645)

15・16 怒った者(=アガスティア)は父〔である海〕を飲み干してしまいました。他の者(=ブリゲ)は、怒って愛しい者(=ヴィシュヌ)を足蹴にしました。最高のバラモンは子供の頃から自分の口に私の敵(=サラスヴァティー)<sup>(66)</sup>を保っています。毎日、ウマーの夫(=シヴァ)を崇拝するために私の家(=蓮華)を壊します。主よ、それゆえに、うんざりしてしまって、私(=ラクシュミー)は常にバラモンの家を然るべく避けるのです。(4086)

15・17 周知の通り、束縛はたくさんあるが、愛着という縄の堅固な束縛は格別である。蜜蜂は木を切ることができるけれども、蓮の萼<sup>(67)</sup>の中では動かない。  
(4382)

15・18 たとえ切られても、白檀の木は香りを捨てない。たとえ年老いても、

象王は遊戲を捨てない。たとえ圧搾機にかけられても、砂糖黍は甘さを捨てない。たとえ財が尽きても、良家の者は良い氣質や美質を捨てない。(2313)

15・19 地上で何らかの比較的小さな山を腕で容易く支えたことにより、あなたは天界と大地において、常に「ゴーヴァルダナ」と呼ばれる。三界を支えるあなたを私は両乳房の先で支えるが、それは顧みられない。あるいは、ケーシャヴァよ、<sup>(68)</sup>多くを語って何になるだろうか。名誉は善業によって得られるものである。(1318)

## 第 16 章

16・1 輪廻を断ち切るために、規定に従って主宰神の境地を瞑想することもなく、天界の扉をこじ開けることのできる法<sup>ダルマ</sup>を獲得することもなく、女の丸い乳房や太腿を夢の中でさえ抱き締めることがないならば、我々は単に母親の青春という木を断ち切るための斧にすぎない。(3318)

16・2 一緒に喋っていても、媚びた目で他の男を見て、心の中ではさらに別の男を思う。女たちには一途な愛情がない。(2371)

16・3 迷妄ゆえに「この女は私に惚れている」と考える愚者は、その女の支配下に入り、愛玩用の鳥のように踊る。(5633)

16・4 財産を得て、誰が傲慢にならないだろうか。〔感覚器官の〕対象を求める者で、誰の災難がなくなるだろうか。地上において、誰の心が女たちによって傷付けられないだろうか。一体、誰が王たちに気に入られるだろうか。誰が時間の支配下に入らないだろうか。貧しい者で、誰が名声を得るだろうか。あるいは、悪人の罠に落ちた者で、誰が安心して道を歩めるだろうか。(1942)

16・5 黄金の鹿は、誰も作ったことがなく、かつて見たこともなければ、聞いたこともない。それにもかかわらず、ラーマには渴望が生じた。<sup>(69)</sup>身を滅ぼす時には、認識を誤るものである。(3324)

16・6 美質によって優れた者となるのであり、高い座に座ることによってではない。宮殿の頂にいるからといって、カラスがガルダになるだろうか。

(2161)

- 16・7 美質はあらゆる場所で敬われるが、財産はどれほど多くても敬われな  
い。満月だからといって、痩せていても汚れのない月のように敬われるだろ  
うか。(2142)
- 16・8 他者によってその美質が称えられた者は、たとえ美質がなくても美質  
を備えた者となる。インドラでさえも、自分で〔自分の〕美質を吹聴したこ  
とにより軽んじられる。<sup>(71)</sup>(3933)
- 16・9 美質は識別知を備えた者のもとに到ると、素晴らしいものになる。宝  
石は黄金と一緒にになると、より美しく見えるものである。(6191)
- 16・10 美質に関して一切知者に等しくても、孤独で拠り所のない者は破滅す  
る。値を付けられないほどのルビーであっても、黄金に嵌め込むことを必要  
とする。(2164)
- 16・11 大きな苦勞によって得られる財産、<sup>グルマ</sup>法を犯すことによって得られる財  
産、敵たちにひれ伏すことによって得られる財産。このような財産は私にと  
って不要である。<sup>(72)</sup>(128)
- 16・12 ただ1人のものである婦人のような財産が何になるだろうか。旅人に  
も享受される遊女のような財産が敬われるべきである。<sup>(73)</sup>(1749)
- 16・13 財産、寿命、女性、食事に関して、すべての人は満足したことがなく、  
満足しておらず、これからも満足しないだろう。(3071)
- 16・14 あらゆる布施、祭式、火への供物の献供、<sup>(74)</sup>バリ献供はなくなってしまう。  
しかし、適切な人に対する布施とあらゆる生き物に対する無畏〔の布  
施〕はなくなることがない。(2023)
- 16・15 草は軽いが、綿は草よりも軽く、物乞いは綿よりも軽い。彼が風に導  
かれてやって来て、私に物を乞わないだろうか。(2590)
- 16・16 誇りを失って生きるよりも、命を捨てる方がましである。命を捨てる  
苦しみは一瞬であるが、誇りを失うと〔苦しみが〕毎日続く。(5978)
- 16・17 好ましい言葉をかけることにより、すべての人が満足する。それゆえ  
に、好ましい言葉だけを口にするべきである。言葉に関して貧しくなること

があるだろうか。(4352)

16・18 浮世という毒樹には甘露のような2つの果実がある。〔すなわち、〕非常に甘い金言と善き人との交際である。(6636)

16・19 多くの生において布施、学習、苦行が繰り返される。他ならぬその繰り返しにより、同じそれが再び繰り返される。(2331)

16・20 書物の中の知識と他人の手にある財産というのは、必要となった時には、知識でもなく、財産でもない。<sup>(75)</sup>(4156)

## 第 17 章

17・1 師のもとではなく、書物を信じて学んだことは、集会において輝かない。それはあたかも、女に宿った情夫の子のようなものである。<sup>(76)</sup>(4155)

17・2 親切には親切を、危害には危害をもって報いるべきである。その場合に過失は生じない。悪人に対しては悪事を行うべきである。(1874)

17・3 遠いもの、克服し難いもの、近くにあるもの。これらはすべて苦行によって達成される。なぜならば、苦行からは逃れ難いからである。(5265)

17・4 貪欲があるならば、悪徳が何になるだろうか。誹謗があるならば、大罪が何になるだろうか。真実があるならば、苦行が何になるだろうか。心が清浄ならば、聖地が何になるだろうか。性格の良さがあるならば、美質が何になるだろうか。優れた威厳があるならば、装飾が何になるだろうか。正しい知識<sup>(77)</sup>があるならば、財産が何になるだろうか。不名誉があるならば、死が何になるだろうか。(5881)

17・5 海を父親とし、ラクシュミーを姉妹とする貝が乞食をすることがあるだろうか。〔運命によって〕与えられていないことに従事することはない。<sup>(79)</sup>  
(4068)

17・6 無能な者が善人になり、財産のない者が梵行者になる。病気の者が神の崇拝者になり、年老いた女が夫に貞節になる。<sup>(80)</sup>(709)

17・7 食べ物や水に匹敵する布施はなく、〔半月の〕12日目に匹敵する日はない。ガーヤトリーよりも優れたマントラはなく、母親よりも優れた神はな

い。(3583)

17・8 タクシャカ<sup>(81)</sup>の毒は牙にあり、サシバエの毒は頭にある。サソリの毒は尻尾にあり、悪人の毒は全身にある。(2471)

17・9 夫の命令なしに断食して、誓戒を保持する女は、夫の寿命を奪う。そのような女は地獄へ堕ちる。(3900)

17・10 女は、布施、100回の断食、聖地巡礼よりも、むしろ夫に洗足水〔を捧げること〕によって清められる。(3286)

17・11 洗足水や飲み水の残り、薄明時の祈禱の残りといった犬の尿に等しい水を飲んで、チャンドラーヤナを実践すべきである。

17・12 布施によって手が〔輝く〕のであり、腕輪によってではない。沐浴によって浄められるのであり、白檀によってではない。敬意によって満足するのであり、食べ物によってではない。知識によって解脱するのであり、剃髪によってではない。(2763)

17・13 床屋の家で〔髭を〕剃ること、鉾石に香を塗ること、水の中に自己の姿<sup>(82)</sup>を見ること。これらはインドラの威厳さえも奪<sup>(83)</sup>ってしまう。(3589)

17・14 トウンディーは直ちに智慧を奪い、ヴァチャー<sup>(84)</sup>は直ちに智慧をもたらす。女は直ちに能力を奪い、乳は直ちに能力をもたらす。(6773)

17・15 善き人たちの心の中で人助け〔の精神〕が目覚めているならば、彼らの不幸は減び、いたる所に幸福がある。(3980)

17・16 もし妻がいて財産<sup>(85)</sup>があり、礼儀と美質を備えた息子がおり、息子にも息子が生まれたならば、インドラ<sup>(86)</sup>の都においてもこれ以上のものがあるだろうか。(5229)

17・17 食事、睡眠、恐怖、性交というこれらのものは人間と動物に共通である。知識は人間の際立った特質であり、知識を欠いている者たちは動物に等しい<sup>(87)</sup>。(1077)

17・18 もし酔いによって洞察力の曇った象王が、漿液を求める蜜蜂たちを平たい耳で追い払ったならば、これはその象王にとって両頬の美しさを損なうものであり、再び蜜蜂たちは輝く蓮の森に住む。(2759)

17・19 王、遊女、ヤマ、火、盜賊、子供、物乞い、8 番目として村長。<sup>(88)</sup>これらの者は他人の苦しみが分からない。(5762)

17・20 「お嬢さん、<sup>(89)</sup>どうして俯いているのです。何かあなたの物を地面に落としたのですか。」「おお、愚か者よ、お前には分からないのだね。青春<sup>(90)</sup>という真珠<sup>(91)</sup>を失くしたのさ。」(210)

17・21 ケータキー樹<sup>(91)</sup>よ、あなたは蛇の拠り所であり、果実がなく、棘があり、曲がっており、沼地に生え、近付き難い。それでも、あなたは香りゆえにあらゆる生き物の親族である。実に、ただ1つの美質はあらゆる欠陥を減ぼすものである。(6331)

(完)

(平成30年度科学研究費16K16699による研究成果の一部)

#### 【略号表】

VSN *Viṣṇusahasranāma with the Bhāṣya of Śrī Śaṅkarācārya*, ed. Ananthakrishna Sastry (The Adyar Library General Series 8). Madras: The Adyar Library and Research Centre, 1980.

#### 【参考文献】

岡田行弘

- 1991 「知恵百頌 (*Prajñāśataka*) —古代インドの処世訓」, 『神戸女子大学瀬戸短期大学学術紀要』第2巻, pp.1-16。
- 1993 「『根本有部律雜事』のニーティ—Bharataの教訓」, 『印度学仏教学研究』第42巻第1号, pp.45-51。
- 1994 「Bharataの教訓—藏漢テキストおよび和訳」, 『神戸女子大学瀬戸短期大学学術紀要』第5巻, pp.13-28。
- 1995 「ヴァラルチ作『百頌』(*Śatagāthā*) 和訳」, 『神戸女子大学瀬戸短期大学学術紀要』第6巻, pp.1-14。

金倉円照・北川秀則

- 1968 『ヒト—パデューシャー—処世の教え』, 岩波文庫。

金沢篤

- 1986 「如意樹—インド植物考序説」, 『東方』第2号, pp.138-147。

上村勝彦

2002 『原典訳 マハーバーラタ I』, ちくま学芸文庫。

2003 『インド神話—マハーバーラタの神々』, ちくま学芸文庫。

定方晟

2011 『インド宇宙論大全』, 春秋社。

田中於菟弥・上村勝彦

1980 『アジアの民話 12 パンチャタントラ』, 大日本絵画。

辻直四郎

1982 「チャーナクヤ・シヤタカ」, 『辻直四郎著作集第三巻 文学』, pp.368-379, 法蔵館。

中村了昭

2012a 『新訳 ラーマーヤナ 1』 (東洋文庫 820), 平凡社。

2012b 『新訳 ラーマーヤナ 3』 (東洋文庫 827), 平凡社。

西岡直樹

2002 『定本 インド花綴り』, 木犀社。

堀田和義

2017 「宰相チャーナキヤの格言詩—*Cāṇakyaṇītidarpaṇa* 和訳 (1)」, 『仏教学セミナー』 第 106 号, pp.1-22。

マジュプリア・T・C (西岡直樹訳)

2013 『ネパール・インドの聖なる植物事典』, 八坂書房。

渡瀬信之

2013 『マヌ法典』 (東洋文庫 842), 平凡社。

Apte, Vaman Shivaram

1978 *The Practical Sanskrit-English Dictionary* (Revised & Enlarged Edition).  
Kyoto: Rinsen Book (reprint).

Böhtlingk, Otto

1966 *Indische Sprüche: Sanskrit und Deutsch*. Osnabrück: Otto Zeller  
Verlangsbuchhandlung (reprint).



Brandis, Dietrich

1906 *Indian Trees*. Delhi: Periodical Experts Book Agency.

Caudharī, Guṇjeśvara

1999 *Cāṇakyaṇītidarpaṇaḥ (Rājanītisamuccayaḥ) hindīvyākhyāviśeṣavaktavyādivibhūṣitaḥ*. Caukhambā Surabhārātī Granthamālā, no.248. Vārāṇasī: Caukhambā Surabhārātī Prakāśana.

Jacob, Colonel G. A.

1995 *Laukikanyāyāñjaliḥ: A Handful of Popular Maxims Current in Sanskrit Literature*. The Vrajajivan Indological Studies, no.2. Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan.

Kressler, Oscar

1907 *Stimmen Indischer Lebensklugheit*. Leipzig: Otto Harrassowitz.

Kumāra, Ajaya

2016 *Cāṇakya Nīti*. Delhi: Prakhara Prakāśana.

Lalye, P. G.

2006 *Laukikanyāyakośa*. Delhi: Bharatiya Kala Prakashan.

Mani, Vettam

1975 *Purāṇic Encyclopaedia*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Sharma, Thakuradatta

1989 *Bhuvaneśa Laukikanyāyasāhasrī*. Varanasi: Vyasa Prakashan.

Sternbach, Ludwik

1963 *Cāṇakya-Nīti-Text-Tradition* vol.1, pt.1. Vishveshvaranand Indological Series, no.27. Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute.

## 註

- (1) viśaya (感覚器官の対象) に viṣa (毒) という音が似ている単語を掛けた表現。
- (2) 再生族の中の最上者 (dvijavara)。
- (3) PD 55 (岡田草稿, p.16)。
- (4) Böhtlingk 1966 や Caudharī 1999 は, pāda d の読みを gacchati dhīmatām (賢者たちの時間は過ぎてゆく) とする。そのため, 賭博は『マハーバーラタ』, 女は『ラーマーヤナ』, 盗みは『バーガヴァタ・ブラーナ』の物語を指し, それらを学ぶこと

を意味すると解するが、やや無理があると思われる。

- (5) シャクラ (śakra)。
- (6) PD 230 (岡田草稿, p.70)。
- (7) 底本の antaḥ sārāhīnānām を antaḥsārāhīnānām と繋げて読む。
- (8) CNS 109 (辻 1982, p.379), ŚG 90 (岡田 1995, p.13)。
- (9) Böhtlingk 1966 によれば、最高の器官 (śreṣṭham indriyam) は視覚器官を指す。
- (10) PD 117 (岡田草稿, p.36)。
- (11) カマラー女神 (kamalādevī)。
- (12) ジャナールダナ (janārdana)。ヴィシュヌ神の 1,000 の名前を記した *Viṣṇusahasranāma* (VSN) には、126 番目の名前として挙げられる。sarvagaḥ sarvavidbhānur viṣvakseno janārdanaḥ/ vedo vedavid avyāṅgo vedāṅgo vedavit kaviḥ// VSN 27. シャンカラ作と伝えられる注釈では、悪人 (jana) を殺す者 (ardayati) などと語源解釈する。janān durjanān ardayati hinasti, narakādīn gamayatīti vā janārdanaḥ/ janaiḥ puruṣārtham abhyudayaniḥśreyasalakṣaṇaṁ yācyata iti janārdanaḥ// Bhāṣya on VSN 27.
- (13) 底本の nānā varṇā を nānāvarṇā と繋げて読む。
- (14) PD 85 (岡田草稿, p.26)。森の王として君臨し、力を振るっていたライオンの Bhāsuraka が、ウサギの知略により井戸に落ちて死んだ物語に基づくもので、『パンチャタントラ』第 1 巻の第 8 話に見られる。和訳は、田中・上村 1980, pp.93-101 を参照。同様の物語は、『ヒトパーデーシャ』第 2 話の挿話 9 の中の挿話にも見られるが、そこではライオンの名前が Durdānta となっている。該当箇所の和訳は、金倉・北川 1968, pp.127-128 を参照。
- (15) ハリ (hari)。VSN では、650 番目の名前として挙げられる。kālaneminihā vīraḥ śauriḥ śūrajaneśvaraḥ/ trilokātmā trilokeśaḥ keśavaḥ keśihā hariḥ// VSN 82. 注釈では、原因もろとも輪廻を取り除く者である (harati) がゆえに、ハリ (hari) と呼ばれると語源解釈する。sahetukasamsāraṁ haratīti hariḥ// Bhāṣya on VSN 82.
- (16) Böhtlingk 1966 は「もし一切を養う者たるハリを称えるならば」と解する。
- (17) ヤドゥ族の主 (yadupati)。VSN には、705 番目の名前としてほぼ同義のヤドゥの最高者 (yaduśreṣṭha) が見られる。sattā sadbhūtiḥ satparāyaṇam/ śūraseno yaduśreṣṭha sannivāsaḥ suyāmunaḥ// VSN 88.
- (18) ラクシュミーの夫 (lakṣmīpati)。VSN には、361 番目の名前としてほぼ同義のラクシュミーを〔配偶者として〕持つ者 (lakṣmīvat) が見られる。atulaḥ śarabho 'bhīmāḥ samayañño havir hariḥ/ sarvalakṣaṇalakṣaṇyo lakṣmīvān samitiṁjayah// VSN 52.
- (19) かつて山々は翼を持ち、自由に空を飛びまわっていたが、大地が不安定となったため、インドラの金剛杵により翼を切られたという神話に基づく。この神話については、上村 2003, pp.51-52 を参照。
- (20) ハリ (hari)。注 15 を参照。
- (21) ジャフヌの娘 (jāhnavī)。
- (22) インドセンダン (Skt. Nimba; 学名 *Azadirachta indica*)。高さ 12~25m にもなる常

- 緑の高木で、その葉、枝、実が非常に苦いことで知られる。詳細は、Brandis 1906, p.139 以下、西岡 2002, p.174 以下、マジュブリア 2013, p.158 以下を参照。
- (23) トウアズキ (Skt. Guñjā; 学名 *Abrus precatorius*)。西岡 2002, p.456 以下によれば、落葉性のつる植物で、さやの中に3〜5個のマメを含む。マメはアズキ大の球形で半分が赤い色、半分が黒い色をしているという。また、マメは宝石商により重量の単位としても用いられる。Brandis 1906, p.225 以下も参照。
- (24) 『マヌ法典』1.88 によれば、6つの行為とは、ヴェーダの教授 (*adhyāpana*)、ヴェーダの学習 (*adhyayana*)、自らのために祭式を行うこと (*yajana*)、他人のために祭式を行うこと (*yājana*)、布施をすること (*dāna*)、布施を受け取ること (*pratigraha*) という6つを指す。該当箇所和訳は、渡瀬 2013, p.35 を参照。
- (25) 後悔しているという意味。
- (26) Böhtlingk 1966 のドイツ語訳では “*treu die Befehle ausführende Diener*” (忠実に命令を実行する召使い) と訳されているため、*sva + ājñā + parāḥ* ではなく、*su + ājñā + parāḥ* と解していると考えられる。
- (27) ヤシヨーダーの息子 (*yaśodāsuta*)。
- (28) 牛飼いの少女たちにとって愛しい者 (*abhīrakanyāpriya*)。
- (29) 味を認識するもの (*rasajñā*)。
- (30) この部分の原語は「ディク・ターン・ディク・ターン・ディグ・エーターン (*dhik tān dhik tān dhig etān*)」であり、太鼓のリズムのようになっている。
- (31) Skt. *Karīra*; 学名 *Capparis aphylla*。砂漠に生える低木で、葉はほとんどなく、ラクダによって食されるという。Brandis 1906, p.33 以下等を参照。
- (32) Böhtlingk 1966 は *mṛd* を陶製の器と解する。
- (33) 以下、この詩節は問答形式で進行する。
- (34) パルミラヤシ、オオギヤシ、ウチワヤシ (Skt. *Tāla*; 学名 *Borassus flabellifera*)。音写して多羅、多羅樹などとも呼ばれる。高さは30mにも達し、直径2mほどの大きな葉をつけ、樹液からは酒や粗糖が作られる。Brandis 1906, p.657、西岡 2002, p.156 以下を参照。
- (35) Apte 1978, Sharma 1989, Jacob 1995, Lalye 2006 によれば、毒の中で育った虫が毒に耐えられることに喩えて、他者にとっては致命的であっても、その中で育ち、慣れて順応した者にとってはそうでないことを意味する。Apte 1978, Sharma 1989, Jacob 1995, Lalye 2006 は、いずれも *Cāṇakyanītidarpaṇa* のこの詩節を挙げている (Sharma 1989 のみ、見出しを *viṣakṛminyāya* ではなく、*viṣakṛṭanyāya* とする)。ただし、Jacob 1995 の記述によれば、Jacob が見た Apte の版は典拠となる詩節を引用していなかったようである。Apte 1978 Appendix p.72, Sharma 1989, p.50, Jacob 1995, pp.45-46, Lalye 2006, p.171 を参照。
- (36) Böhtlingk 1966 の “*ahaṃ kṛṣṇa raṇotsavaḥ*” という切り方に従った。底本や Caudharī 1999, Kumāra 2016 などでは、*pāda c* を “*ahaṃ kṛṣṇaraṇotsavaḥ*” と繋げて読んでおり、その場合は「私にとってはクリシュナの戦いが祭りである」となる。
- (37) CNS 5 (辻 1982, p.370)。

- (38) ラグ族の後裔 (rāghava)。
- (39) カルパタル (Kalpataru)。望みの物をもたらし力を持った木 (如意樹) の 1 種で、カルパヴリクシャ (Kalpavṛkṣa) と呼ばれる。神々の世界には、マンドーラ (Mandāra)、パーリジャータ (Pārijāta)、サンターナ (Santāna)、カルパヴリクシャ (Kalpavṛkṣa)、ハリチャンダナ (Haricandana) という 5 つの如意樹があるとされる。これについては、Mani 1975 の Kalpavṛkṣa の項目等を参照。ただし、金沢 1986 のように、このような理解に注意を促す見解も出ている。
- (40) 如意牛 (Kāmagō)。神々や聖者たちが望んだ時に、いつでも乳をもたらし能力を持つとされる牛のことで、今日の世界にいるすべての家畜はその子孫に当たるとされる。Kāmadhenu という呼び方が一般的であり、他にも、Surabhi, Nandinī といった名前で呼ばれる。
- (41) ラグ族の主 (raghupati)。
- (42) Böhrtling 1966 は、人間の誕生とともに生じる食べ物と母乳のことと解する。
- (43) コロシントウリ (Skt. Indravāruṇa; 学名 Colocynth)。つる性の多年草で、苦みの強い果実になる。
- (44) 2 つの世界とは、現世と来世を指す。
- (45) ŚG 79 (岡田 1995, p.11)。
- (46) 底本の tad bhāreṇa を tadbhāreṇa と繋げて読む。
- (47) 底本の yad bhaviṣyo を yadbhaviṣyo と繋げて読む。
- (48) 死後も名声が残るということを意味する。
- (49) 山羊の首にぶら下がっているもので、肉垂、肉髯などと呼ばれる。今日でも、その機能はよく分からない、もしくはないと考えられている。
- (50) 原語は ekākṣara で「唯一の不滅なるもの」と解することもできる。
- (51) PD 235 (岡田草稿, p.72)。
- (52) ヒンドゥー教の世界観では、世界の中心にジャンプ・ドゥヴィーパと呼ばれる円盤状の大陸がある。そして、その周囲をドーナツ状の 7 つの大陸が取り囲んでおり、大陸と大陸の間にはラヴァナ海、イクシュ海、スラー海、サルビス海、ダディ海、ドグダ海、ジャラ海という 7 つの海がある。詳細は定方 2011, p.44 以下を参照。
- (53) ここで想定されているのは、藁ぶき屋根などのようなものと考えられる。
- (54) PD 191 (岡田草稿, p.58), ŚG 24 (岡田 1995, p.6)。
- (55) PD 17 (岡田草稿, p.6)。
- (56) go (言葉) という語は、牛も意味するため、他人の悪口へと言葉を向けることと、穀物へと牛を向けることをかけたダブルミーニングとなっている。
- (57) PD 125 (岡田草稿, p.38), ŚG 20 (岡田 1995, p.6)。
- (58) 13・18 と同様、「唯一の不滅なるもの」を意味しうるが、ここでは内容的に相応しくないと考えられる。
- (59) PD 186 (岡田草稿, p.56), PD 236 (岡田草稿, p.72)。
- (60) 円盤を手にする者 (cakrapāṇi)。VSN には、908 番目、995 番目の名前としてはほぼ同義の円盤を持つ者 (cakrin) が見られる。araudraḥ kuṇḍalī cakrī vikramy

ūrjitaśāsanah/ śabdādigaḥ śabdasahaḥ śīśirah śarvarīkaraḥ// VSN 110; śaṅkhabhṛn nandakī  
cakrī śārṅgadhanvā gadādharaḥ/ rathāṅgapāṇir akṣobhyaḥ sarvapraharaṇāyudhaḥ// VSN  
120.

- (61) 『マハーバーラタ』 1.15-17 によれば、太古、メール山に集まった神々が不死になるための飲料である甘露を得るため、亀の王アケーパーラに攪拌棒としてのマンガラ山をのせて大蛇ヴァースキを巻き付け、アスラの群れとともにその両端を引っ張って大海を攪拌した。そうして出現した甘露を悪魔と争って手に入れた神々が飲んでいてたところ、ラーフという悪魔も神に変装して飲み始めた。しかし、甘露がラーフの喉に達したところで、それに気付いた太陽と月が神々に告げたため、ヴィシュヌがその頭を切り落とした。それ以来、太陽と月を恨んだラーフが太陽と月を飲み込んで日蝕と月蝕を起こすようになったという。このエピソードに関しては、上村 2003, p.80 以下を参照。
- (62) シャンカラ (śaṅkara)。
- (63) 注 61 に述べた『マハーバーラタ』の大海攪拌の神話は、『ラーマーヤナ』 1.45 にもほぼ同内容のものが見られる。ただし、そこでは、大蛇ヴァースキが齒で石を噛んだために猛毒が流出し、全世界を焼き尽くそうになったため、シヴァ神が全世界を救うためにその毒を飲み干したというエピソードを加えており、その結果として、シヴァ神が「青黒い顔を持つ者 (nīlakaṇṭha)」と呼ばれるようになった由来を説いている。上村 2003, p.80 以下を参照。また、該当箇所のと訳は、中村 2012a, p.209 以下を参照。
- (64) PD 140 (岡田草稿, p.42), ŚG 9 (岡田 1995, p.5)。
- (65) セイロンライティア (Skt. Kuṭaja; 学名 Wrightia antidysenterica)。低木で、白い花を咲かせる。
- (66) 顔の穴 (vadanavivara)。
- (67) 6本の足を持つ者 (ṣaḍaṅghri)。
- (68) ケーシャヴァ (keśava)。VSN では、23 番目、648 番目の名前として挙げられる。  
yogo yogavidāṃ netā pradhānapuruṣeśvaraḥ/ nārasimhavadapuḥ śrīmān keśavaḥ puruṣottamaḥ//  
VSN 13.; kālaneminīhā vīraḥ śauriḥ śūrajaneśvaraḥ/ trilokātmā trilokeśaḥ keśavaḥ keśihā  
hariḥ// VSN 82. 注釈では、髪 (keśa) が美しい (va) 者という解釈を筆頭に様々な解釈が見られる。詳細は、Bhāṣya on VSN 13, 82 を参照。
- (69) ラグ族の息子 (raghunandana)。
- (70) このエピソードは、『ラーマーヤナ』 3.42 以下に見られる。該当箇所のと訳は、中村 2012b, p.164 以下を参照。
- (71) PD 156 (岡田草稿, p.48), ŚG 22 (岡田 1995, p.6)。
- (72) PD 128 (岡田草稿, p.40)。
- (73) Böhlingk 1966 は pāda cd を yā na veśyeva sāmānyā と読む。この場合は、「〔旅人によっても享受される〕共有の遊女ではない〜」となる。底本のテキストは否定辞の na ではなく tu と読んで意味が逆になるため、sāmānyā を sā mānyā と切っており、訳出したように「そのような〔財産〕が敬われるべきである」となる。

- (74) 穀物や米などといった、祭式で捧げるために料理された食べ物の一部のこと。渡瀬 2013, p.466 等を参照。
- (75) CNS 83 (辻 1982, p.377), PD 164 (岡田草稿, p.50)。
- (76) PD 234 (岡田草稿, p.70)。
- (77) 底本の *sad vidyā* を *sadvidyā* と繋げて読む。
- (78) 宝庫 (*ratnākara*)。
- (79) 底本では *nādattam* を *na + ādattam* と分けるが、ここでは *na + adattam* と解する。
- (80) カーマ文献ではしばしば、年齢に従って女性を *bālā* (～16 歳), *taruṇī* (17 歳～30 歳), *prauḍhā* (31 歳～55 歳), *vr̥ddhā* (56 歳～) の 4 種に分けており、この区分に従うならば、この詩節に現れる年老いた女 (*vr̥ddhā*) は 56 歳以上ということになる。*yāvat ṣoḍaśasaṅkhyam abdam uditā bālā tatas triṃśataṃ yāvat syāt taruṇīti bāṇaviśikhaprakhyam tu yāvad bhavet/ sā prauḍhety abhidhīyate kavivarair vr̥ddhā tadūrdhvaṃ smṛtā nindyā kāmakaḷākalāpavidhiṣu tyājyā sadā karmibhiḥ// Anaṅgaraṅga* 4.1.(ed. Richard Schmidt. Lāhaura: Paṃjābasamskṛta Pustakālaya, 1927)
- (81) <sup>ナーカ</sup>蛇族の王の一人で、カーシヤパ仙とその妻カドルーの子とされる。『マハーバーラタ』1.45 以下によれば、ジャナメージャヤ王の蛇供で焼かれそうになったところを、アースティーカ仙に救われたとされる。該当箇所和訳は、上村 2002, p.214 以下を参照。
- (82) シャクラ (*śakra*)。
- (83) この詩節は *pāda d* を 9.12 と同じくする。
- (84) ショウブ (Skt. *Tuṇḍī*; 学名 *Acorus calamus*)。その効能については、『ガルダ・プラーナ』192.37 にも同様の記述が見られる。*adbhir vā payasājyena māsam ekaṃ tu sevītā/ vacā kuryān naraṃ prāñṇaṃ śrutidhāraṇasaṃyutam// Garuḍapurāṇa* 192.37.(ed. Rāmaśaṅkarabhaṭṭācārya. Kāśīsaṃskṛtagranthamālā 165. Vārāṇasī: Caukhambhā Saṃskṛta Saṃsthāna, 1998)
- (85) 底本の *yadi rāmā yadi ca rāmā* では意味がとれない。Böhtlingk 1966 のように、*yadi rāmā yadi ca ramā* と読む。
- (86) 神々の最上者 (*suravara*)。
- (87) PD 98 (岡田草稿, p.30)。
- (88) 原語は *grāmakaṇṭaka* (村にとっての棘、村に害をもたらす者)であり、他の解釈の余地がある。なお、Böhtlingk 1966 の読みでは、*grāmakūṭaka* (村長)となっている。
- (89) 少女 (*bālā*)。ただし、後半部を読めば分かるように、男性が年老いた女性をからかって言ったもの。インドにおける少女 (*bālā*) の年齢については、注 80 を参照。
- (90) Böhtlingk 1966 は青春という真珠を乳房と解する。
- (91) アダン (Skt. *Ketakī*; 学名 *Pandanus odoratissimus*)。マジュプリア 2013, p.191 以下によれば、常緑の小高木で、その花は非常に香りが高いという。また、その木には香りに引き寄せられた蛇が棲むと言われ、家の近くにはあまり植えられないとされる。他にも、Brandis 1906, p.659 等を参照。